大阪インターナショナルチャーチ　　ダニエル・エルリック牧師　　2014 年 1 月 5 日
シリーズ: ヨナ書#2　　聖書個所: ヨナ書 1:4-17　　中心聖句: ローマ 8:35
タイトル: あなたは何者か　　特別行事: 聖餐式

I.　導入

あけましておめでとうございます。先週、ヨナ書の学びを始めました。先週を振り返るために、**ヨナ書 1:1-3** を読みましょう。**「1:1 主の言葉がアミタイの子ヨナに臨んだ。 1:2 『さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。』 1:3 しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。ヤッファに下ると、折よくタルシシュ行きの船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった。 」**主の言葉が預言者ヨナに臨みましたが、ヨナは神に従わずに逃げました。彼は、ニネベとは逆方向にあるタルシシュに向かう船に乗ったのです。

どんな問題があっても、主のもとに行くのが賢明です。しかし、私たちが迷い出たり逃げたりしても、神は私たちのことを簡単にあきらめたりなさいません。神は絶えない恵みをもって私たちを追い求めてくださいます。ヨナ書に綴られているのは、神の恵みがヨナとニネベの人々を追い求めた記録です。また、神から逃げようとしてヨナが乗った船の船員たちにも及ぶ神の恵みです。これについては、今から学んでいきたいと思います。では、ヨナ書 1:4-2:1 を読みましょう。

II.　聖書朗読　(ヨナ書 1:4-2:1、新共同訳)

1:4 主は大風を海に向かって放たれたので、海は大荒れとなり、船は今にも砕けんばかりとなった。 1:5 船乗りたちは恐怖に陥り、それぞれ自分の神に助けを求めて叫びをあげ、積み荷を海に投げ捨て、船を少しでも軽くしようとした。しかし、ヨナは船底に降りて横になり、ぐっすりと寝込んでいた。

1:6 船長はヨナのところに来て言った。「寝ているとは何事か。さあ、起きてあなたの神を呼べ。神が気づいて助けてくれるかもしれない。」 1:7 さて、人々は互いに言った。「さあ、くじを引こう。誰のせいで、我々にこの災難がふりかかったのか、はっきりさせよう。」そこで、くじを引くとヨナに当たった。 1:8 人々は彼に詰め寄って、「さあ、話してくれ。この災難が我々にふりかかったのは、誰のせいか。あなたは何の仕事で行くのか。どこから来たのか。国はどこで、どの民族の出身なのか」と言った。 1:9 ヨナは彼らに言った。「わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ。」 1:10 人々は非常に恐れ、ヨナに言った。「なんという事をしたのだ。」人々はヨナが、主の前から逃げて来たことを知った。彼が白状したからである。

1:11 彼らはヨナに言った。「あなたをどうしたら、海が静まるのだろうか。」海は荒れる一方だった。 1:12 ヨナは彼らに言った。「わたしの手足を捕らえて海にほうり込むがよい。そうすれば、海は穏やかになる。わたしのせいで、この大嵐があなたたちを見舞ったことは、わたしが知っている。」 1:13 乗組員は船を漕いで陸に戻そうとしたが、できなかった。海がますます荒れて、襲いかかってきたからである。 1:14 ついに、彼らは主に向かって叫んだ。「ああ、主よ、この男の命のゆえに、滅ぼさないでください。無実の者を殺したといって責めないでください。主よ、すべてはあなたの御心のままなのですから。」

1:15 彼らがヨナの手足を捕らえて海へほうり込むと、荒れ狂っていた海は静まった。

1:16 人々は大いに主を畏れ、いけにえをささげ、誓いを立てた。2:1 さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。

III. 教え

では、いくつかの視点でこの個所を考えていきましょう。まず、船員の視点です。船乗りは無骨でたくましい人たちです。海で生きていくのは並大抵のことではありませんから、海で生きる男たちを強くします。当時は小さな木製の船で航行していたので、船乗りの仕事はたいへん危険でした。ヨナがどんな船に乗ったのか詳しくはわかりませんが、この模型のような船に乗ったのではないかと思われます。これは、当時の貨物船の模型です。

船長と船員たちは、積荷と乗客を乗せて地中海を行き来することで生計を立てていました。激しい嵐に見舞われ、船が沈没しそうになると、彼らはできるだけのことをしました。**ヨナ書 1:5a「 船乗りたちは恐怖に陥り、それぞれ自分の神に助けを求めて叫びをあげ、積み荷を海に投げ捨て、船を少しでも軽くしようとした。」**

船乗りたちは、それぞれ自分の頼る神がありました。けれども、どの神も嵐を静める力を持ってはいませんでした。積荷を海に投げ捨てるというのは、船を軽くする実用的な手段ですが、同時に、神々に対する捧げ物のようにも思えます。海は依然として荒れ狂ったままです。あらゆる国の小さな神々には何の力もありませんでした。それは本当の神ではないからです。

ついに、船乗りたちはくじを引き、それはヨナに当たりました。**ヨナ書 1:8-9「1:8 人々は彼に詰め寄って、『さあ、話してくれ。この災難が我々にふりかかったのは、誰のせいか。あなたは何の仕事で行くのか。どこから来たのか。国はどこで、どの民族の出身なのか』と言った。 1:9 ヨナは彼らに言った。『わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ。』」** ヨナの答えを聞いた船員たちは恐れました。おそらくこの時点で、彼らは気づいたのでしょう。創造主なる神があがめられるべきお方であり、このお方の怒りを人は恐れなければならないということを。自分たちの頼っていた小さな神々は頼りにならない、海も陸もお創りになった天の神、主だけが自分たちを救うことができるのだと、気づいたに違いありません。

ヨナ書 1:11「彼らはヨナに言った。『あなたをどうしたら、海が静まるのだろうか。』海は荒れる一方だった。」船乗りたちには成す術がありませんでした。ここで彼らは、主の預言者であるヨナに助言を求めます。きっと、ヨナを通して主が語ってくださることを求めていたのでしょう。しかし、ヨナの答えに彼らはうろたえました。私を船から海に放り込みなさい、とヨナが言ったからです。

船員たちはこの答えをすぐには受け入れず、自力で何とかしようと必死に頑張りました。**ヨナ書 1:13「 乗組員は船を漕いで陸に戻そうとしたが、できなかった。海がますます荒れて、襲いかかってきたからである。」** 彼らはもはや、自分の神々を頼りにはしていませんでした。彼らの偶像は迷信に過ぎませんでした。ここで、人の力も救いをもたらすには十分でないことを、彼らは思い知ります。

天地を造られた創造主なる神に頼る前に、自分で何とかしようとするのは人の常です。何とか知恵をしぼって、自力で自分を救おうとします。けれども、うまくいきません。何百年何千年という歴史の中で、人間が作り上げた想像上の神々に救いを求めます。けれども、それは本物の神ではありません。見ることも聞くこともできません。私たちを救うことはできないのです。

船員たちはとうとう、預言者ヨナをとおして語られた主の言葉に怖気ながらも従うことにしました。けれども実行する前に、彼らは祈りました。それは、彼らが初めて主に向かって捧げた祈りです。**ヨナ書 1:14「 ついに、彼らは主に向かって叫んだ。『ああ、主よ、この男の命のゆえに、滅ぼさないでください。無実の者を殺したといって責めないでください。主よ、すべてはあなたの御心のままなのですから。』」**ヨナが自分の罪を告白したにもかかわらず、彼らがヨナを無実の者と言っているのは興味深いことです。粗暴な船乗りがヨナを自分たちより正しいと思ったのは、悔い改めの心が感じ取れたからではないかと私は考えます。

ヨナ書 1:15-16「1:15 彼らがヨナの手足を捕らえて海へほうり込むと、荒れ狂っていた海は静まった。 1:16 人々は大いに主を畏れ、いけにえをささげ、誓いを立てた。」聖書の中で、特に旧約聖書には、普通では考えられない理解しがたいことがたくさんあります。この話の続きを読んだことがあれば、神の奇跡的なご介入によってヨナの命が助かることはわかっています。とは言え、船に乗っていた人はヨナを殺すことによって命拾いしたと思っているわけですから、なぜ神がこのようなことをなさるのか理解に苦しむ部分です。歴史の著者である主は、将来に起こるできごとをあらかじめ示すドラマを演出しておられるのではないかと私は思います。これについては後ほど詳しく話しましょう。

海が静まるのを見て、船員たちは主にいけにえをささげて誓いを立てました。つまり、全能の神、主を礼拝したのです。神はヨナの不従順を用いて、神を知らなかった人々に救いをもたらされました。ヨナは最初から神に従うべきでしたが、従わなかったことさえも、神のご栄光のために、そして、神の愛を人々に届けるために用いられたのです。ヨナはまだニネベに神のみことばを届けていませんでしたが、すでに異邦人への伝道者となっていました。偶像を礼拝していた人々に、唯一まことの神のあわれみと力を示したのです。

この話から、**ローマ 8:28** が思い浮かびます。**「 神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」**この時点ではまだ明らかではありませんが、起こったことのすべてはヨナにとって良いようにはたらきました。それ以上に、ヨナの不従順は、新しい人が主とつながるきっかけとなりました。このおかげで、それまで神の愛を知らなかった人が神の恵みあわれみを知るようになったのです。

今度は、ヨナに注目しましょう。**ヨナ書 1:5b** は非常に興味深い個所です。**「 しかし、ヨナは船底に降りて横になり、ぐっすりと寝込んでいた。」**船乗りたちがみんな嵐に恐れをなしていたとき、ガリラヤ出身の陸者ヨナはぐっすり眠っていました。もうひとりそんな人がいたと思いませんか。

マルコ 4:37-39 の話を覚えていますか。**「 4:37 激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。 4:38 しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。 4:39 イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。」**弟子たちの中には、漁師が何人かいました。彼らは海に慣れていたはずですが、この時は怖がっていました。一方、ガリラヤ出身の大工だったイエスは、すやすや眠っていました。弟子たちはイエスを起こして寝ていることを咎めました。それでも、彼らは無事助かりました。

ヨナの話は歴史上のできごとです。聖書に書かれてある通りのことが起こったと私は信じます。同時に、歴史の著者である主によって、ヨナの話とイエスの話の間に非常に興味深い共通点が織りなされています。ヨナが実際に語った預言の言葉はほんの少ししか記録されていませんが、ヨナ書のできごとの多くは、イエスの来臨を示す預言的な型と言えます。

弟子たちはイエスを起こして咎めました。船長はヨナを起こして咎めました。**ヨナ書 1:6「 船長はヨナのところに来て言った。『寝ているとは何事か。さあ、起きてあなたの神を呼べ。神が気づいて助けてくれるかもしれない。』」**そして、船乗りたちがくじを引いて、そのくじがヨナに当たりました。人々はヨナに詰め寄り、ヨナは自分が主のしもべであることを告げました。

その少し後の個所で、ヨナは自分の命を他の人たちの身代わりに捧げます。**ヨナ書 1:12「ヨナは彼らに言った。「わたしの手足を捕らえて海にほうり込むがよい。そうすれば、海は穏やかになる。わたしのせいで、この大嵐があなたたちを見舞ったことは、わたしが知っている。」**ヨナは自殺を図ったわけではありません。むしろ、他人の命を救うために、自分の命を犠牲にしたのです。嵐がにわかに止むと、船乗りたちは主を崇めて救われました。嵐から助かっただけでなく、永遠の命を得たのです。**ローマ 10:13「『主の名を呼び求める者はだれでも救われる』のです。」**

ヨナと乗り合わせていた船乗りたちは、主が嵐にまさる力の持ち主であることをその目で見ました。弟子たちも、イエスが嵐を静められた時にその力を目の当たりにしました。**マルコ 4: 41「 弟子たちは非常に恐れて、『いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか』と互いに言った。」**この方はどなたなのでしょう。この方はイエスです。主であり神であるお方です。ヨナが大波の中に投げ込まれた時に、嵐を静められたのも同じお方です。

主は船乗りたちに救いをもたらしました。また、ヨナにも恵みを施されました。**ヨナ書 2:1「さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。」**「クジラ」とする訳もあるようですが、「巨大な魚」のほうがより正しい訳です。魚の種類は特定されていませんが、人間をそのまま呑みこめるということは、巨大なサメだった可能性が高いと思われます。

近年でも、人を呑みこめるほど大きなホオジロザメが水揚げされていますし、化石などから古代のサメはさらに大型だったことがわかっています。もちろん、魚がヨナをたやすく呑みこんだにしても、魚の腹の中で三日間もヨナが生き延びるには、神の奇跡がないと不可能です。ヨナは魚の中で死んだが復活したという説もありますが、どちらにせよ奇跡が必要になります。

イエスがヨナについてお話になった場面を覚えていますか。**マタイ 12:38「 すると、何人かの律法学者とファリサイ派の人々がイエスに、『先生、しるしを見せてください』と言った。」**これはおもしろい言い分です。というのも、イエスはすでに多くの奇跡を行っていたからです。けれども、イエスはご自身の奇跡について語らずに、こうお答えになりました。**マタイ 12:39-40「 12:39 イエスはお答えになった。『よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがるが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。 12:40 つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中にいることになる。』」**

イエスのお働きを予め示すしるしとしてヨナの話を捉えることを、イエスは勧めておられます。とくに、ヨナが魚の腹の中に三日三晩いたことは、イエスご自身の死と埋葬と復活を物語ると示しておられます。それ以外にも、興味深い共通点がいくつも見られます。

ヨナ	イエス	参照
ガリラヤ出身	ガリラヤ出身	列王記下 14:25, マルコ 1:9
イスラエルに遣わされ、後に異邦人のもとに遣わされた	イスラエルに遣わされ、後に異邦人のもとに遣わされた	列王記下 14:25,ヨナ書, 福音書
嵐の最中に船で寝ていた	嵐の最中に船で寝ていた	ヨナ書 1:5, マルコ 4:38
船乗りたちに居眠りを咎められた	漁師たちに居眠りを咎められた	ヨナ書 1:6, マルコ 4:38
質問されて、自分自身について語った	質問されて、自分自身について語った	ヨナ書 1:8-9, ルカ 23:3, ルカ 22:70
自分自身をいけにえとして捧げた	自分自身をいけにえとして捧げた	ヨナ書 1:12, エフェソ 5:2
ヨナを海に投げ込んだ人々がヨナの無実を宣言した	イエスを死に追いやった当人が、イエスの無実を宣言した	ヨナ書 1:14, マタイ 27:4 (ユダ), ヨハネ 18:38 (ピラト), ルカ 23:47 (百人隊長)
彼の犠牲によって船乗りたちが助かった	このお方の犠牲により、信じる者すべてが救われる	ヨナ書 1:15, ヨハネ 1:29, 使徒 16:31
魚の中に三日三晩いた	土の中に三日三晩いた	ヨナ書 1:17, マタイ 12:40
魚から生きて出てきた	墓から生きて出てこられた	ヨナ書 2:10, マタイ 28:6

ヨナとイエスの間には、もちろん大きな違いもあります。ヨナは預言者に過ぎません。しかも、神に不従順な預言者でした。一方、イエスは神の御子であり、子なる神です。罪のない完全なお方で、十字架の死にまでも従い通されました。とは言え、預言的なキリストの型としてヨナを認めるに十分な類似点があると言えます。

IV. 結び

今日のメッセージの結びとして、皆さんに課題とエールをお送りします。まず課題です。ぜひ、「私は何者なのだろう」と自問することを 2014 年の抱負としてください。ヨナは素性を尋ねられて、主を信じていること、主の民の一人であることをためらわずに告げました。私たちも同じようにできるはずです。キリストにあって、私たちは神の子とされています。神の恵みによって救われ、イエスに似た者とされつつある者です。**ローマ 8:29** で、パウロは宣言しました。**「 神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。」**イエスとともに歩むことで、私たちはイエスに似た者と変えられていきます。私たちの課題は、周囲の人々が私たちの生き方にイエスを見出すように生きることです。今日、ヨナの人生にイエスが垣間見えたのと同じことです。私たちがイエスに似た者となり、言動によって主の愛を表すことができますように。

つぎに、皆さんにエールを送ります。**ローマ 8:35「 だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」**パウロはこのように問いかけ、イエスの愛から私たちを引き離すものは何もないと自らきっぱりと答えました。今日学んだように、ヨナが不従順であっても神はヨナを愛しつづけ、絶えない恵みでヨナを追い求めてくださいました。ヨナのように、私たちも主のものであることを常に認めるなら、主はあきらめずに、愛と恵みをもって私たちを追い求めてくださるでしょう。どんな問題に直面しようと、神に愛されているという確信は常に持てます。

V. 祈り